

入選

日常の親切

千葉県 第一中学校 1年 宮城 琴羽

「今、何ページのどこやってるの？」

私は授業中よく隣の人に聞いています。すると、あたりまえのように教えてくれます。

私は生まれてすぐ見つかった病気のせいで、片方の眼がありません。そして残った右眼は弱視です。

ふだんの生活の中で、人は約 8 割の情報を目からとらえているそうです。でも、視ることの苦手な私は、みんなと同じ量の情報を眼から取ることはできません。

学校では拡大教科書を使い、授業を受けています。拡大教科書は、みんなが使っている教科書の 1 ページが 4 ページぐらいにわけられているため、授業中先生が「何ページの〇〇を見てください」と言っても見つけられないときがあります。そんなときに、隣の人に聞くとやさしく教えてくれたり、先に気づいて教えてくれます。

中学校になると、教科ごとに先生が変わるため、先生によって字体が違ってきます。なので、一番前の席にいても画数の多い字は読み取ることができないときがあります。そんなときも、隣の人に聞くとふつうのこのように教えてくれます。

小学校低学年の頃は、緊張してなかなか聞くことができませんでした。でも徐々に慣れてくると、周囲もあたりまえのように教えてくれるようになりました。そうするとつい頼ってしまいたくなりますが、聞きたいことがあっても友だちの授業を妨げてしまわないように、できる限り自分で解決して、どうしてもわからないところだけ教えてもらうようにしています。

小学校では日常のできごとのように過ごしていたことも、中学生になり新しい環境で同じように学校生活を送れるのか心配でした。でも、入学してみても何も変わらない学校生活を送れています。

クラスにみんなと少し違う私がいっても、そのことが特別なことではなく、自然なことのように受け入れてくれるみんなに感謝しています。

視ることの苦手な私が、みんなと同じように日々を過ごすことができているのは、私の状況を理解してあたりまえのように接してくれる周囲の手助けがあるからだと思います。きっと特別であることなのに、私は不自由なく過ごせています。それはみんなからのやさしさに支えられているからです。

私はこれからも、たくさんの人に助けてもらいながら生きていきます。だからこそ、助けてもらった分以上に誰かを助けられる人になりたいです。みんなは自然に助けてくれます。それは大変なことで、難しいことだと思います。今の自分になにができるかわからないけれど、今までたくさんの人に支えてもらってきたことだけは忘れずにいれば、いつか誰かに心を寄り添うことのできる人になれるのかなと思います。